

象を殺さないで！

一九八九年十月、スイスのローザンヌにおいて日本を含む一〇二カ国によって構成されているCITES（ワシントン条約加盟国によって構成されている国際団体）の会合が催された。議題は絶滅の危機が迫っているアフリカ象の保護についてであった。

象牙細工は高価な商品である。精巧なアクセサリや置物以外にもビリヤードの球、箸、髪止め等々、象牙を細工して作られるものは多い。

原料となる象牙の値段は一キロ三万円程度（一九八九年現在）だが、正式に承認されている枠以外での組織的な密猟と密売とが後を断たず、これらは今まではほぼ野放しの状態にあった。象牙の密売によって得られる儲けの大部分はアフリカの内戦で使われる兵器を買い入れるために消費され、人道的立場、また動物保護の立場からもプラスにはなっていない。

象は記憶力の良い動物で、広い大陸の中で水のあった場所を覚えていく。早魃によってまわりが乾燥しきってしまうと、何百キロ離れていようとも以前水があったところに戻り、長い牙を使って穴を掘る。穴の深さは五メートルにも達することがあるという。象が生まれ持つこの本能は、象ばかりでなく他の動物の生死の決め手ともなる能力なのである。

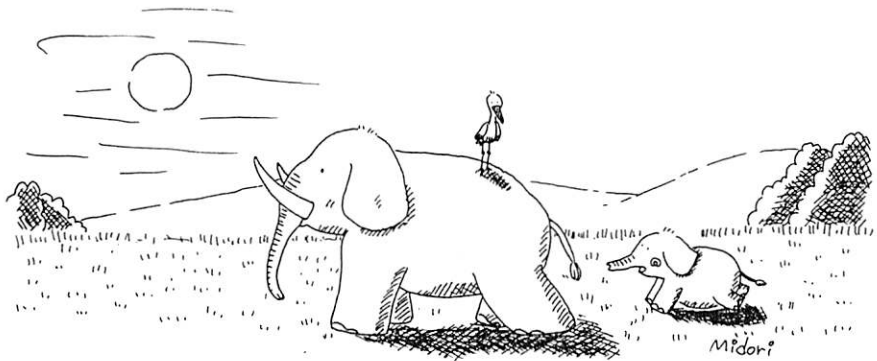
数十年前の象牙マーケットで流通していた象牙は、一本二メートル以上、重さ八十キロぐらいあるものも珍しくなかったという。それが一九七九年には一本につき平均十キロ弱の重量になってしまった。それでも象牙採取のために狩猟される象は、比較的成長したものののみが選ばれていた。しかしその後密猟につぐ密猟が重ねられた結果、最近では象でさえあれば大きさも雌雄も選ばずマシンガンで射殺されるようになり、象牙一本の平均重量は約四キロにまで落ちている。

一本一本は小振りでも全体に消費される量は変わらず、結果として今まで以上の頭数の象が射殺される。以前は一トンの象牙を採集するのに五十頭の象が殺されていたのが、現状では百二十頭以上殺さなければ同じ重量にならない。ここ十年間に象牙のために命を失った象は百万頭以上であり、現在生存しているアフリカ象の総数はわずか六十万頭ほどと予想されている。このままでは今後二十年以内にアフリカ象は地球上からその姿を消してしまう、との悲観的な予測が一般的となった。

この絶滅の危機に瀕したアフリカ象を保護するためには、単に狩猟の量を制限するだけでは追いつかず、ついに十月十七日、象牙を加工して作った製品の全世界的規模による輸出入禁止が決定されるに至ったのである。

これによって困るのは、象牙そのものの売買や精巧な象牙細工によって生計を立てていた人々だが、ピアノ製造業も同様に、この晴天の霹靂にも似た決定によって窮地に追い込まれることになった。ピアノの白鍵には昔から象牙が使用されており（木でできた鍵盤の上に厚さ一ミリに満たない薄い象牙が張られている）、指先の感触や汗の吸収度その他の見地から、事実ベストの特性を持つ材料でもあった。事のついでに記しておけば、ピアノの黒鍵はクラリネットやオーボエに使用されるのと同じ材料である黒檀から作られている。

全世界で製造されるピアノの鍵盤のために命を落とす運命にあった象



は、年間七十五頭ほどであった。これはアフリカの自然公園保護のために公に狩猟を許可されていた年間六百頭の枠よりも少ない数である。象も増え過ぎると広園内の生態系に悪影響を及ぼすため、保護区域内では通常人為的な動物の数の調整が行われている。

あまりにも突然の決定に、ウィーンにある世界的なピアノ製造の名門ベーゼンドルファー社もあわててしまった。ベーゼンドルファー社にとって重要なマーケットでもある日本を含め、法律上の扱いでは残念ながら純然たる「象牙細工」に該当する白鍵をその標準装備としているピアノの輸出に、大きな障壁が出現したわけである。鍵盤は国外にある下請け会社から納入されていたが、これも同時に不可能になってしまった。本社工場にあるストックもその量に限りがある。

ベーゼンドルファーのピアノでも、これまで熱帯地方へ輸出するものに限っては「アイヴォリン」という名のプラスチック製の鍵盤を装備していた。熱帯気候の下で、象牙の鍵盤はすぐ黄色く変色してしまうからである。さしあたってはこれを標準装備として流用するにしても、あまり弾き心地の良いものではない。ソ連に山積みされているマンモスの牙を象牙の代用にする、というアイデアもあったが、長い目で見た場合の解決策にはなり得ない。

そこで化学的に調合されたプラスチック製品の中から象牙の持つ特質を備えたものを選択、あるいは開発することになった。

アメリカやドイツで開発された既製品には「発癌性が疑われる」として使用禁止となった成分が配合されているものしか見当たらず、他製品のテストが続行中である。見通しとして一九九〇年には解決がつきそうだが、既製品の中から優れた特性を持ち合わせたものが見つかるか、あるいは新しいものを開発しなくてはならぬはめになるかは、今のところ不明である。

中古ピアノの輸出入も、当然の事ながら今までのようにすんなりとはいなくなる。ウィーンなどをはじめとする留学地で手に入れた象牙鍵盤つきの楽器を、日本に帰国する際の引っ越し荷物として持ち込むのも、基本的には不可能となってしまった。最終的には日本の税関の審査官の裁断ひとつによるわけだが、何とかそのまま通してもらえたケースがあった一方、鍵盤の象牙のみを剥がされて没収された後、やっと楽器本体が輸入許可になった、という話も耳にした。

象牙が指先に心地良い、というのは事実である。特に汗っかきで脂性の手をしたピアノリストにとって、プラスチック製の鍵盤は演奏の際にすべりやすく危険である。一見たいらに磨かれているように見える象牙の表面には目に見えない細かい隙間や穴があり、これが指先に適度な抵抗感を与えるとともに、汗などの水分も多少は吸収してくれる。単に指先で触れた時の感覚も、無機質であるプラスチックと有機質である象牙とではそこに差が生じるのは当然だろう。

目先の利く日本のピアノ製造業者は、実はすでに数年前から象牙に代わる製品の開発に成功しており、現在ではこの材質が主流になりつつある。人工蛋白質をベースにした新製品では鍵盤の表面に自然の象牙に似た凹凸が加工されており、弾き心地は決して悪くない。ただしこの新素材の今後の課題は、何十年という単位で見た場合の耐久性についてであるらしい。

資源保護に関しての標的は今回は差し当たって象牙だけで終わったが、早晩、熱帯地方で成育する木材もその保護対策の対象となるであろう。南アメリカの熱帯雨林がどんどん姿を消し、そのまま放置すればそのうち地球全体にかかわる問題になろう、との予測は、最近とみにマスコミでも騒がれるテーマである。木なくしてはその存在を考えることの不可能なピアノにとって、これも将来頭を痛める問題に発展する可能性がないとはいえない。